

平成 30年 12月 18日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880268

氏名 栗原美紀

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先: 都市名 セランゴール州バンギ (国名 マレーシア)
- 研究課題名 (和文) : マレーシアのインド系移民におけるヨガの伝承と展開:
エスニシティと宗教性の結合と分離
- 派遣期間: 平成 30年 8月 13日 ~ 平成 30年 12月 17日 (127日間)
- 受入機関名・部局名: マレーシア国民大学エスニック研究所
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先では、マレーシア社会に生きるインド系移民がヨガを伝播させていった過程と、それに対するエスニシティや宗教の関わりを明らかにするべく、主としてインタビュー調査を実施した。また補完的に、ヨガが実践されている場において参与観察も行った。調査対象は、クアラルンプール、セランゴール州プタリンジャヤ、プジョンでヨガを教える指導者とそのクラスである。本調査の結果、明らかになったことは主として以下の3点である。

- ①20世紀の半ばからマレーシア社会にヨガが伝播し始めた。その当初の伝承方法としては、インドに本部を持つ団体がマレーシアに支部をつくり、指導者を派遣するといった組織的な取り組みがあったことに加えて、それとは全く異なる経緯からマレーシアでヨガを教えるようになった人々もいる。例えば、結婚をきっかけにインドからマレーシアにやってきた女性などがそれにあたる。マレーシアのインド系エスニックグループの間でヨガが普及し始めた背景には、マレー半島における地理的条件と歴史的・社会的・文化的条件の相互作用があったといえる。
- ②クアラルンプールとその周辺のインド系指導者に実践されていたヨガの形態の特徴として、高い筋力と柔軟性を必要とするアーサナだけでなく、比較的簡単な運動(スクシュマビヤヤマなど)が頻繁に取り入れられていることが挙げられる。それは、生徒の身体能力や需要に合わせた実践内容の選択であるが、指導者たちはそうした知識をインドに学びに行ったり、インドから参考書を取り寄せたりすることで身につけている。彼らは自身のネットワークをヨガの習得にも活用しており、エスニックなつながりが、幅広いヨガの知識や技能へのアクセスをより容易にしていた。

- ③多様に展開されているヨガの形態の中には、宗教とのつながりの中で実践されてきたものもある。そうした種類のヨガの実践者は、ヨガ自体を宗教化させるのではなく、自身の宗教の教えとヨガ哲学や理論とを重ね合わせることで、ヨガに対する自分の理解を深めており、そのことがさらなるヨガの展開を生み出している。

また、ヨガがマレーシア社会に伝播したことによって生じた宗教的な交流とその影響については十分に調査することができなかつたため、今後の課題としたい。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究成果の報告】

本プログラムにおける研究成果について、まずは本年度の紀要(上智大学社会学論集)に論文を投稿する。また、来年度は、日本社会学会の年次大会で口頭報告を行う予定である。なお、本プログラム中に得られた知見は、今後執筆する博士学位論文においても用いられる。

【今後の研究の方向性】

今回の調査においては、研究対象をインド系のヨガ指導者に限定していたが、今後はクアラルンプールやセランゴール州でヨガを教える人々全てを調査対象として研究を進めたい。それは、マレーシア社会のヨガ指導者が、インド系のみならず、多宗教・多国籍に構成されており、それぞれの境界を超えたヨガの集団的(社会的)実践が現在のこの地域におけるヨガの形態をつくりあげているためである。このように研究対象を広げることで、現時点では一エスニック研究に留まっている本研究が、古来多目的かつ多方向的に人々が移動することで形成されてきたマレーシア社会の現代的様相を理解する足掛かりにもなるだろう。さらには、複雑に境界がひかかれている現代社会を生きる人々の身体実践とその意味について、理論的に分析することにもつながっていくと考えられる。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

まずは、マレーシアにおいて外国人研究者が調査を遂行するために必要な、調査許可の申請手続きを円滑に進めることができた。この手続きにおいては、研究助成を受けていることの証明文書の提出が求められる。本プログラムに採用されたことによって、必要書類を用意することが可能となった。

また、本プログラムから経済的な支援を受けることで、調査対象地に中長期的に滞在することができた。その結果、特に以下の3点から今回の調査研究がより有意義なものとなった。

- ①インフォーマントとの関係性の構築:本研究は、インタビューを中心としており、質問項目には、ヨガ指導者がヨガを実践し始めた経緯など、個人的な内容が大いに含まれる。そうした話題について、初対面での調査で深く掘り下げることは難しい。しかし、本プログラムによって4か月の滞在が可能となり、その間に各インフォーマントと複数回話す機会を得ることができ、インタビュー時においてもより重要な論点について話を聞くことができた。
- ②インタビュー日程の調整:本調査の対象者であるヨガ指導者の多くは、マレーシアを拠点としながらも、世界各地でヨガの指導を行ったり、ワークショップに参加したりしている。そのため、国内に滞在していない時間も長く、短期間の滞在中でインタビューの実施日の調整することは困難だっただろう。
- ③新たな論点の気づき:最初に立てた調査計画を遂行しつつも、これまでの調査よりも長く現地に滞在したことで、当初は想定していなかった重要な論点を浮かび上がらせることができた。それらの点については今後の課題としているが、今回の調査によりそうした新たな論点を発見できたことで、本研究課題の理解をより深めることができるであろう。